

新宿歌舞伎町ホストによる 清掃ボランティア

〜ボランティアを行って

気づいたこと、変わったこと〜

歌舞伎町という街で生きるということとは、どういうことだろう。

きつと誰も歌舞伎町で生きているなんて思いたくない街で、歌舞伎町で生きていくなんて心に決めて来る街でもない。

僕もそうだった。二〇歳そこらのガキが大人に混じれる場所。年齢も性別も国籍も関係ない自分の力量だけで生き延びられる街。成り上がれる街ではない。生き延びられる街。歌舞伎町ドリームなんてまやかした。夢なんてどこにもない。

成功者なんて見たことない。アジアの端っこのわざと混雑させたビル群に身を隠すように生きている。ネオンの光が灯りだすとやっとなんか

ちが落ち着いて外に出る。

誰も自分に興味がない。誰も自分を見ていない。道端で泥酔者なのか寝ている人が居ても誰も足を止めない。自己責任

昨日まで親友だった奴が今日は敵で。昨日まで敵だった奴が今日は味方で。ガラスの笑顔でガラスの笑顔を誘って。心の中はいつだって渴いているからアルコールで暖めて。

歌舞伎町って街はひとくくりにこんな街なんて言えない。まとまりなんか無い。トップなんかいない。



手塚 真輝

誰も他人になんて興味ない。

過去なんて関係ない。経歴なんて関係ない。新しい名前を持って、自分の心のしこりを自分で取り除きにくる街。

僕は子供の頃から優等生だった。勉強も運動も人並み以上に出来た。親にも将来を期待されていた。だけど僕は医学部受験に失敗した。妥協で入った大学で僕は見えない自分の未来から逃げ出した。

行き場がなくて歌舞伎町に逃げ込んだ。たどり着いたのはホストクラブだった。世間からは身を隠せても、中には中

のルールがあつて、簡単に毎日過ごすことはできない。いやむしろただ何事もなく毎日過ごすことのほうが難しい。

世間から外れた新しい常識の中どうか日々逃げ出さないでいることで精一杯。

でも逃げ出さないで日々生き続けることで、新しい常識が自分の常識になつていく。自分が世間から外れていることも、ずれていることも気づいていてくれど気づかないフリをしてただ毎日生きていく。

歌舞伎町の中で地位と名誉はお金と権力。

社会からは外れた、この街だけで通用する名前で虚像の自分を上げていく。

虚像の自分を上げることが、自分のしこりを消すことになるかどうかなんてわからない。でも虚像の自分を大きくすることがこの街で生きること。

虚像の自分だつて言い訳しないと生きられない。本当の自分がこんなだと認めたくない。

目立って、お金持つて。

僕は虚像の自分を上げていった。家族にも会わず、友達にも会わず。過去を忘れて。

家族の呼び方すら僕は忘れていた。なりふり構わず突き進んだ。

わき目も振らず上だけを目指して走りつづけた。

気がついたらナンバーワンホストになっていた。ホスト界では有名人。

ちやほやされて、益々調子に乗つて、虚像の自分に酔っていた。

浸りきつた僕は、今度はこの街から抜け出すことが出来なくなつていった。

見て見ないフリをしていた本当の自分。世間。

世間に戻ることなんて恐くて出来なかつた。

気づいたら二六歳になつていった。

僕は独立した。歌舞伎町の定石通りに。

でも歌舞伎町で成り上がろうとも大金持ちになろうとも思つた訳ではなかつた。

ただ選択肢が僕にはもうなかつただけだつた。

僕は歌舞伎町の小さなホストクラブの社長になつた。

入店してくる少年達を歌舞伎町の新しい常識に染めて浸して、僕のような利益をうみ出すホストに育てようと思つた。

一年経つても全然うまくいかない。

皆僕みたいに出来ない。やらない。

僕のように虚像の自分を作ろうとしない。虚像の僕が怒鳴つても聞く耳を持たない。

僕のやつてきたことは間違つていったかどうかなんてまだわからない。ただホストとして僕は一応成功者だ。ホストクラブにやつてくる少年たちは虚像の僕のようになりたいたいと思つて来ている筈だ。

でも誰も虚像の僕の話を受けない。

結局僕は自分のことしか考えていなかった。

今の自分は本当の自分じゃないなんて言い訳しながら、過去の栄光を振りかざす傲慢な社長でしかなかった。

ずっと自分が嫌いだったから。

本当に自分のようになつて欲しいなんて思っているはずがなかつたのかもしれない。

真剣に一人の人間として話さなければ誰も耳なんて傾けてくれる筈がない。

一人また一人仲間が去つていった。僕は自分を罵倒した。情けなかつた。僕が間違つていった。もう遅い。

やる気もなくなつた。

だけど、自分勝手な僕の側に、立ち



新潟県庁での寄付
(筆者右から3番目)

止まってしゃがんでしまっている僕の側に、残った何人かの仲間がいた。僕の傍から離れないでいてくれている仲間がいた。

虚像の僕じゃなくて、僕を見てくれている仲間がいた。

いや虚像の僕も含めて一緒に居てくれようとする仲間がいた。

僕は立ち上がった。こいつらと一緒に生きていきたい。本当にそう思った。

僕は仲間に教えられた。

過去の自分を受け入れようと思った。過去の自分があつて今の自分がある。

僕の目の前はずっと真っ暗だった。

状況は何にも変わっていない。未来が拓けたわけでもない。

でも僕の目の前に広がる景色は今までとは全く違う景色になっていた。

新潟中越地震の際、僕はホストのオーナー四人で四〇〇万円寄付をしに新潟県庁に行った。

仕事帰りにスーツのままタクシーに乗り込んで。

完全によこしまな気持ちだった。本当に失礼な話だが、ニュースにでもなつて店の宣伝になればいいなつていうのが本音だった。

だけど全く目立たなかった。ニュー

スにもならなかった。県庁の出納課で義援金を渡して、それで終わりだった。物足りなさが顔に出たのか、県庁の職員が、避難所を見に行きますか？と提案してくれた。そんなに乗り気ではなかったが、せつかなので行ってみることにした。

地震から日にちが多少経っていることもあつて、避難所にはお年寄りと子供たちがばかりだった。職員の方がマイクで僕らを紹介してくれた。

「歌舞伎町のホストの方々です。先ほど県庁に四〇〇万円寄付してくれました。」

体育館に拍手の音が響いた。

僕は驚いた。

おばあちゃんが僕に話しかけてきた。

「ありがとう」

頭を下げて握手を求められた。僕はたじろいだ。

本当にたじろいだ。

「ありがとう」

僕は目立ちたくてニュースにならなくて募金したんだ。

おばあちゃんのためを思って募金したんじゃないよ。

そんなことは言えなかった。

自分で自分を受け入れられるようになったとしても、世間が僕らホストを受け入れるわけではないと思つていた。何したつて「どうせホストだろう」つて思われると感じていた。

色眼鏡で見られていると思つていた。四〇〇万円募金しても、感謝されるなんて一ミリも期待していなかった。

色眼鏡で見っていたのは僕だった。

おばあちゃんたちは僕たちがホストだろうが、何だろうが関係ない。

僕らが募金をしたそのことを見てくれていたのだ。

逆差別をしていたのは僕だった。

僕の中で音が聞こえるくらいにガラスのプライドが弾けた。

「ありがとう」を言わなければいけないのは僕だった。

帰りの道中何ともいえない、味わつたことのない晴れやかな気持ちだった。

この気持ちを仲間たちにも感じて欲しいと思つた。

職業劣等感。

どんなに売り上げをあげても、どんなに歌舞伎町で有名になつても、どんなにお金を稼いでも、僕らは世間から



自分の成長のため。

仲間のためっていうと何だか照れくさいし、かっこつけのように聞こえるかもしれない。でも僕は、本当は自分のために何でもやっているんだと思う。

仲間のためっていう心のもとで、僕は自分の成長のために何でもやっている。

過去を受け入れた僕は、過去があるから今があるって思える。今はまだまだゴールじゃなく成長の過程であり、今までも今もたまたまホストをやっているだけで、これからなんてわからない。

仕事も家族も自分の時間もそれぞれ点で存在しているのではなく、自分の人生という線で繋がっているんだ。

僕はみんなの1歩先を歩いている。

僕が足跡を見せなければいけない。

ホストだって何か出来るというのを見せなければいけない。

1月に本を出した。

執筆の依頼を受けても今まではずっと断ってきた。裏話的な自叙伝ものばかりだった。僕は沢山のお客様に支えられてきて、沢山の女性を傷つけてきて今があるのに、自分の過去を格好良く美化して書くなんておこがましいと思って出来なかった。

でも今回の出版社は僕のそんな気持ちを汲んでくれた。

僕だけではなくて皆にとって意味のあるものを作りたかった。

僕は今の為に、未来の為に、仲間の為に書こうと思った。

皆が自分の上司を誇れるような、ホストだってカッコいい「作品」を作れるんだって思えるようなものを作ろうと思った。

勿論経験談は踏まえるが、皆に上手く伝えられない気持ちを書き綴った。

「俺がミーティングで言っていることは本になるんだぞ！」

そう皆に思って欲しかった。誇りに思って欲しかった。その気持ちだけで僕は半年間、仕事の合間に書き続けた。

伝わっているかどうかはわからない。

皆のためという言い訳で僕は頑張れた。みんなの為と言いながら一番僕のためになった。

でも皆が成長することが、僕の成長だと今は本当に思っている。

今まで生きてきた嬉しいことも悲しいことも全部が今の僕を作っている。

昔は悪いことをしたと開き直る気もない。だからって引きずって下を向いたって誰も報われない。開き直ると、過去や現在を踏まえて前を見るのでは全然違う。

忘れちゃいけない。

「自分をあきらめるにはまだ早い」そんなタイトルを本につけた。

きっとこれからも沢山の人を傷つけて、僕も沢山傷つくだろう。でも僕はまだまだこれからだ。

自分の未来を想像して笑って、歯をくいしばって今を生きようと思う。

でも成長云々を抜きにしても僕は今の仲間たちとずっと一緒に居たいって、子供の頃、クラス替えしたくない小学生のような気持ちで満たされている。

見下されている気持ちでいる。

だからブランド物で身を固めて、高級車に乗って。

でもそれで劣等感を拭えるのは一瞬で。

僕もずっとそうだった。

だけど新潟で僕は知った。ホストだって良い事をすればやった「そのこと」を見てもらえるんだ。

ホストという職業が社会の為になっているか？と問われれば素直にハイとは言えない。逆に悪影響を与えることのほうが多いのが現状かもしれない。

ホストなんてなくなればいい。

そうかもしれない。でもその根本はホストにならざるを得ない奴らもいるってことで。歌舞伎町に来て人生リセットしなきゃならない奴らがいるってことで。

もう一度這い上がろうと、逆転してやろうと思つてホストになるわけで。

ホストになって頑張ることを覚えて、人に誉められて、仲間が出来て、お金も掴んで。

そうやって人として成長できる奴だって沢山いて。

僕だって沢山のことを学んだ。

でも頑張っても頑張っても拭えな



った。劣等感。
少しでもその気持ちを払拭できて、
より前を見ればと思った。

僕が新潟で感じたこと、知ったことを
少しでも仲間を感じてもらおうと思
った。

歌舞伎町でゴミ拾いを始めた。

少しでも歌舞伎町に恩返しが出来れ
ばという気持ちも多少はあった。

でも仲間たちのことを思って、自分
たちの為にゴミ拾いを始めた。

月に一度強制でゴミ拾いをやらせた。

みんな最初は本当に嫌がった。いや
今でも嫌がついているかもしれない。で
も僕は真意は隠して、「目立って沢山
お客さんくるよ」とみんなを煽ってま
ずやらせた。

案の定これには沢山の取材が来てく

れた。僕は素直に毎回
答える。

「自分たちの成長の為
にやっています」

どのくらいのパースで
やっていますか？ と聞
かれれば、

「だいたい月に一回取
材が入るので、そのとき
にやっています」

目立つという目的で
マスコミを使おうと思って失敗した僕
だったが、今はみんなを動かす為
に利用させてもらっている。

取材が入るということでそんな嫌
じゃなくやれる。

でも終わった後は取材が入ったから
とか入ってないからとか関係なく、自
分の中で感じるものがあるはず。僕の
本当の狙いはそこなんだ。

実際うちの店でポイ捨てる奴も、
路上喫煙する奴もいなくなった。

一度皆で渋谷にいたときに渋谷だか
らいいかと僕が路上喫煙したら、一斉
に皆から罵声を浴びせられた。

ポイ捨てるのが、路上喫煙を
することが、格好悪いと当たり前と思
えるようになっていたのだ。

ポイ捨てるような男に付いて行
くいい女なんていない。

いい女にモテなければそんなことはし



ない。カッコいい男はそんなことはしない。
みんなを納得させる基準はカッコい
いか、かっこわるいか。モテルかモテナ
いか。

動機がいくら不純であっても、ゴミ
拾いをやり終えた後に皆の気持ちは、
たとえ少しであっても、僕が新潟で感
じた気持ちを持っていると思う。

今でも僕は社会貢献だとかポランテ
イア精神がどうだとかは強くは思っ
ていない。

でも、やらない善より、やる偽善だ
とも思う。

僕らは僕らの為にゴミ拾いをしてい
る。

僕はこれからも自分たちの為にやっ
ていきたいと思っている。